

幼児期における社会的スキルの発達

仲江 真奈

(お茶の水女子大学大学院 人間文化研究科)

【目的】

幼児は社会的スキルを身に付けていても、いつも同じ方略を用いて遊んでいるわけではない。それは、勢力の強弱関係と交渉との関連(謝, 1995) 問題解決方略と対人関係との関連(山本, 1996)などの観察データからも示されている。相手の年齢によって幼児が社会的スキルを使い分けしているか、また社会的スキルの発達に性差があるかについて検討することが本研究の目的である。

仮説1、年齢が高くなるにつれて社会的スキルが低スキルから高スキルに移行する。

仮説2、年齢が高くなるにつれて方略の種類が増加する。

仮説3、年齢が高くなるにつれて、年上、同年齢、年下の相手に対して低スキルと高スキルを使い分ける。

【研究方法】

・社会的スキルの評定

社会的スキル測定はLadd&Mize(1988)、小林(1993)の対人葛藤場面を修正し、非占児側の場合の社会的スキルを測定するように構成した。そして紙芝居の中で物の取り合いの葛藤場面を呈示した。

・被験児 鎌倉市の保育園児

3歳児 36名 M=20名 F=16名 (3:0~4:4)

4歳児 46名 M=27名 F=19名 (4:5~5:4)

5歳児 35名 M=18名 F=17名 (5:5~6:4)

【結果】

社会的スキルテストにおいて得られた幼児の反応から、社会的スキルカテゴリーを作成し、それに基づいて得点化をした。

(1)仮説1 - 検証された。

年齢(3、4、5歳児)と性(男女)と相手(年上、同年齢、年下)の3要因分散分析を行ない、年齢×相手の交互作用に有意な傾向が見られ($F(4, 222) = 2.34, p < .10$)、年齢の主効果が有意だった。

(2)仮説2 - 検証された。

新たな方略が出る度に1点カウントした。

年齢(3)と性(2)の分散分析を行なった。その結果、年齢の主効果が有意であり($F(2, 111) = 7.81, p < .01$)、性の主効果には有意な傾向($F(1, 111) = 2.80, p < .10$)が見られた。

(3)仮説3 - 検証された。

レベルの推移を見るために社会的スキルの8つのスキルを2つのレベルに分け、コクランのQ検定を年齢別に行なった。

I 男女込みで年齢別分析

その結果、5歳児では3つの方略に有意差が見られた($Q = 6, df = 2, p < .05$)。4歳児では3つの方略に有意傾向の差が見られた($Q = 5.25, df = 2, p < .10$)。3歳児では3つの方略に有意差は見られなかった。

II 男女別にて分析

女兒にはどの年齢にも有意差は見られなかった。

男児のみ5歳児で有意差($Q = 7, df = 2, p < .05$)

4歳児で有意傾向が見られた($Q = 3.2, df = 2, p < .10$)。

3歳児では相手の年齢に応じて社会的スキルの方略を使い分けておらず、4歳、5歳になると、相手の年齢に応じて低スキル・高スキルの使い分けがみられた。

【考察】

男女共に年齢によって社会的スキルが高くなることが明らかになった。また4歳児になると方略の種類が増加するばかりではなく方略の使い分けも始まることが示された。このことは年中児になるとルールを認識してくる時期であるため、自分の非占児の立場を理解し、方略を使い分けし始めたのではないだろうか。

男女の社会的スキルの発達の異なる点は男児のみが、方略の種類が増加し、相手の年齢に応じて高スキル、低スキルを使い分けていたことだった。つまり、女兒は一定の社会的スキルで相手に対処するのに対して、男児は相手によって方略を変動させるということを意味していると考えられる。

このように幼児期における社会的スキルの発達の側面を明らかにすることができたといえる。